

サハリン地質調査体験記

・ロシア人（狩猟民族）と韓国系の人（農耕民族）による社会の二重構造

北海道の地層、特に中央部を南北に分布する1億年前から5,000万年前に作られた神居古潭変成岩を研究するにはサハリンは貴重な地域です。1990年以前はソ連の社会主義体制のため自由に調査はできませんでしたが、1990年頃からやっと外国の研究者を受け入れ始めました。北海道の地質研究者もとりあえず論文でしか知らないサハリンの山へハンマー片手に私を含めた10名ほどのグループで出発しました。その後、現在まで少しずつですが調査を続けてきました。

現在のサハリンへのルートは、稚内ーコルサコフ間のフェリーと札幌（函館）ーユージノサハリンスク間の航空便がありますが、当時は女満別ー札幌ー新潟ーハバロフスクーユージノサハリンスクと航空機を乗り継いなければならず、時間と費用がかかりました。新潟で一泊し、翌日の夜中にユージノサハリンスクの飛行場に降り、空を見上げると北極星が高かったのが記憶に残っています。

首都ユージノサハリンスクには第2次世界大戦で日本人がサハリンに連れていった韓国系の方が多く住んでいます。現在、中国や韓国との間で問題になっています日本の戦争責任ということで、我々も韓国系の人を街中で見かけると負い目を感じました。バザール（市場）が街中にあり、そこで韓国系のおばあさんから大阪弁で話しかけられ、戦争当時に大阪から連れて来られた話を伺いました。日本での生活を懐かしく話してくださり、日本人に対して戦争責任を取れと言う雰囲気はまったくありませんでした。このことについて当時は不思議に感じていましたが、調査の回を重ねるにつれてサハリンの社会事情が分かり、ロシア人（狩猟民族）と韓国系の人（農耕民族）の社会の二重構造が見えてきました。

行政を握っているのはロシア人です。サハリン州知事もロシア人ですし、例えば岩石の国外持ち出し許可証を貰うために役所に出向くと背の高い白系ロシア人が非常に多く、権力を握っていることが分かります。やはりサハリンはモスクワと同じロシア共和国なのです。彼ら狩猟民族は貯蓄性、計画性が韓国系の農耕民族に比べ少し欠如しているようです。今は貧乏していても、明日に目の前に鹿が2頭やって来て、それを捕らえればラッキーという発想です。彼らは自然保護に対し「熱心」で、街の中の木を切るのに猛反対します。木を切るとそれを伝って街の中に来ていた鹿などの動物が来なくなり、獲物が取れないという発想のようです。しかし、サハリンの山は日本への木材輸出による伐採で荒らされ、鹿など大型哺乳類はもちろん鳥などの小型動物までも極端に少なくなっています。山の中に行くのに日本人だとまず道路を整備しますが、ロシア人はどこでも走る車（四輪駆動の幌つきトラック）を確保します。その車で道なき山奥や、砂浜の中を走りまくり、夜は荷台が寝床になります。彼らは外でのキャンプ生活が好きで、野外調査でも昼食に食料と皿をいっぱい持って出かけすぐに宴会が始まります。最近、やっと日本人の簡素な昼食（おにぎり）を理解し、調査の際の昼食時間が短くなりました。

経済を握っているのは韓国系の人です。韓国系の人はいくつかの肩書きの名刺を持っており、多様なポストで活躍していることが分かります。私達が接した韓

国系の人にはきれいな日本語をしゃべりますので、日本人とロシア人の間に入り、問題を解決してくれます。日本人と同じモンゴロイドであり、農耕民族という連帯感があるのでしょうか。1994年頃社会体制が社会主義から自由主義社会へと変わると外国の資本の導入である「合併会社」の設立が相次ぎました。この時、ロシア人と直接交渉を持った外国資本は会社をロシア人に資本を独占される結果になりました。ある時「合併会社は外国人の資本所有を制限する」という法律を可決し、数多くの合併会社がロシア人の独占となりました。日本人用の一流ホテル「サハリンサッポロ」も見事にロシア人に資本を独占されました。大学の研究機関でもロシアとの共同研究で多くの費用を払ったにもかかわらず期待された成果が得られませんでした。そのため1995年～2000年では共同調査が沈滞しました。私達の地質グループはお金がない民間人のグループで、現場で働いている韓国系の人と接触を保ってきたため現在まで友好的に調査を続けることができました。朝、夕の食事はホテルに隣接した韓国レストランでニンニク入りのカレーライスなどを作ってもらいました。調査で夕食が遅くなると、レストランでは韓国系の人達が礼装した「秘密」のパーティーがしばしば開かれていました。その時の彼らには異国の地での民族の強い団結を感じました。最近「コリアンチャーチ」と呼ばれる韓国系の教会がユージノサハリンスクに6軒ほど建てられ、韓国系の人達の「おおやけ」の集会場となっているようです。

「日本に一番近いヨーロッパ」と言われるサハリンは、第二次世界大戦の歴史的な背景のもと、ロシア人（狩猟民族）と韓国系の人（農耕民族）の二重構造を持ちながら、共存体制で発展してきたようです。（つづく）

（合地 信生）



道なき道走るロシアの四輪駆動車

発行 斜里町立知床博物館協力会 2005.5.20
099-4113
北海道斜里郡斜里町本町49 斜里町立知床博物館内
TEL:01522-3-1256/FAX: 3-1257
<http://www5.ocn.ne.jp/~museumsp/>